

研修生レポート

アーカイブと現象学的な分析方法

川上伸太郎 (RAM2研修生 / 精神科医)

アーカイブにおける「構造」

今回はじめてアーカイブについて考えました。調べてみると、アーカイブという言葉は色々な意味を帯びているようですが、ある事柄についての情報を収集し、保存し、蓄積していくことのようにです。土屋さんの今回の講義の中では、「演劇に関連する資料をアーカイブしていくと、ある演劇についての『構造』が見えてくるのではないか」という話がありました。そこにどんな「構造」が見えてくるのか、実に興味深かったです。

現象学的な分析方法

私は、精神科医として、「現象学的な分析方法」に興味を持っています。そもそも、現象学とは、観察者が対象物を認識する学問です。それをういた分析方法とは、「対象物（患者さん）を認識するために、調査、収集をして、エポケー（判断保留）しながら、ありのままに記述し、保存していくと、本質直観が働き、本質（患者さんの本心）に接近できるかもしれないが、そこに客観は存在しない（患者自身にはなれない）」ということです。

アーカイブと現象学的な分析方法の共通点

アーカイブでも、収集と記述、保存という現象学的な分析方法に似た部分があり、土屋さんは、そこに『構造』が現れるということでした。哲学思想の流れとして、現象学はいわゆる「本質直観」という部分で、形而上学的すぎると批判され、その後、そこには「構造」があることで説明できるのではないかとする、レヴィ・ストロースやフーコーの構造主義的な考えに補完されました。土屋さんが「構造」に行きついた過程と哲学思想の流れが類似しているように感じました。また「アーカイブは歴史を導くことに関係が深い、実は物語を導くことが多い。さらに歴史も変わることがあり歴史が客観的であるとはなかなか言えない」という話がありました。現象学でも記述された体験は客観には至れないという前提があり、人が体験したことは歴史というよりは物語で、現象学的な分析方法においても物語の収集が大事になってくるのです。

最後に

私の考えとしましては、精神や文化、地域、社会などの複雑で無形な「構造」を表出するため、人間の主観的体験（物語）を調査、収集し、エポケーしながら、ありのままに記述し、保存することで、ふとした瞬間に浮き彫りになるのかもしれませんが。そういう意味で、現象学の「本質直観」みたいな、いわゆる「じっくり」する何かを大切にしてみてもいいのでしょうか。